

# 庄野潤三「プールサイド小景」における チャールズ・ラム『エリア随筆』の影響

米 田 華 慧

## 1. はじめに

庄野潤三の「プールサイド小景」（『群像』、1954年12月）は、中年サラリーマンの夫、青木が会社の金を使い込んで解雇され、青木家の家庭生活に波乱が生じるという話である。本作は1955年に第32回芥川賞を受賞している。この作品を比較文学の観点から論じた先行研究は少ないが、以下の2点が外国文学との関係を論じている。

河崎良二は「『夕べの雲』の核にある『幻の景色』、『幻の声』とはまさにラムの『夢の子供たち—幻想』と結びついている」<sup>1)</sup>と述べ、庄野の『夕べの雲』<sup>2)</sup>がチャールズ・ラム『エリア随筆』の影響を受けていることを指摘している。また、村手元樹は「『プールサイド小景』は『勤め先の金の使い込み』という事態が平穏な家庭の日常を破り、波紋が広がって行くという、『コーラス・ガール』同様のモチーフと構造を取り入れている」<sup>3)</sup>と、作中でチューホフの笑劇「コーラス・ガール」の「勤め先の金の使い込み」というモチーフが使われていることに言及している。この2つの論文は、庄野が外国人作家の影響を受けていることや、外国文学から想を得た文学的なモチーフが作中に用いられていることを述べたものである。河崎は前述の論文で、庄野潤三の研究について「特に若い頃に親しんでおられたイギリスのエッセイスト、チャールズ・ラムとの関わりを論じた批評が必要である」<sup>4)</sup>と述べているが、現時点では河崎の論文の他に庄野潤三とチャールズ・ラム『エリア随筆』との関係性を考察した論文はない。しかし、本作には明らかに『エリア随筆』の影響が見られる。

本稿では、庄野がチャールズ・ラムからどのような影響を受けているのかを考察するとともに、「プールサイド小景」とチャールズ・ラム『エリア随筆』を比較対照する。

## 2. 庄野潤三とチャールズ・ラム

前章では庄野がチャールズ・ラムの影響を受けていることを指摘したが、彼はどのようにしてラムの『エリア随筆』と出会ったのだろうか。庄野はラムとの出会いについて、「文学交友録」（『新潮』、1994年1月～12月）で以下のように述べている。

チャールズ・ラムと『エリア随筆』の名を最初に教えてくれたのは、住吉中学の五年のときの英語の受持の中尾治郎吉先生であった。五年の副読本にラムの文章が出ていた。（中略）

中尾治郎吉先生が、  
「ラムというのはいいい人で、『エッセイズ オブ エリア』という本がある。今はまだ無理だが、もし興味があるなら先で是非読みなさい。その中でも特に美しいのは」

とあって、「エッセイズ オブ エリア」の名と一緒に黒板に書かれたのが、‘Dream Children : a Reverie’であった<sup>5)</sup>。

大阪府立住吉中学校（現大阪府立住吉高等学校）に在学していた庄野は、1938年に中尾治郎吉先生からチャールズ・ラムの「エッセイズ オブ エリア」と“Dream Children : a Reverie”を紹介されている。その翌年、1939年4月に大阪外国語学校英語部（現大阪大学外国語学部）に入学した庄野は、心斎橋の丸善で『エリア随筆』を購入して「夢の中の子供」を読んでいる。さらに、庄野の自筆年譜では、同年に「中学の教科書に載っていたラムの文章を訳して『ふるさと』という題で『外語文学』に出した<sup>6)</sup>と記されており、庄野はラムに深い関心を寄せていたことが分かる。

大阪外国語学校を卒業した庄野は、1942年4月に九州帝国大学（現九州

大学)の法文学部に進学し、友人たちと「ラムの研究会」を開いている。この研究会の様子は、「前途」(『群像』、1968年8月)の作中で描かれている。「前途」は、戦時下の学生生活を描いた日記体の小説で、庄野が「全部一字一句そのとおり、日記に書きとめてあったことを書きました」<sup>7)</sup>と明言するほど、私小説的な作品である。主人公の漆山は、哲学科の高木から誘われ、高木と蓑田と漆山の三人で「ラムの研究会」を開くことになる。研究会の開催が決まったあと、漆山は蓑田に「夢の中の子供」、「煙突掃除人の讚」、「古磁器」の三篇を読むことを勧めている。以下は、「前途」の「ラムの研究会」の描写である。

今日のところ、「ハアトフォドシャアのマカリイ・エンド」を蓑田、僕、高木の順で読んだ。品のある、やさしい、美しい文章で、高木と二人で感心し合った。(中略)

来年のはじめは、「煙突掃除人の讚」を読むことに決めた。これで第一回の「夢の中の子供 幻想」、第二回の「休暇中のオックスフォード」と、合せて三篇読んだわけである。三人とも、この会を大へん楽しみにし、また期待をかけている<sup>8)</sup>。

このように「前途」では、学生時代に友人たちと「ラムの研究会」を開き、『エリア随筆』の「夢の中の子供」や「休暇中のオックスフォード」などを読んだことが記されている。

小説家として活動するようになってからは、『チャールズ・ラム伝』を執筆した福原麟太郎と交流を深めている。庄野は1958年の秋に『命なりけり』(1957年10月、文藝春秋新社)に収められた福原の「治水」という随筆を読んで感銘を受ける。そして、1959年3月に福原に『ガンビア滞在記』(1959年3月、中央公論社)を送り、同年5月には福原から自身が執筆した『本棚の前の椅子』(1959年5月、文藝春秋新社)をもらっている。この『本棚の前の椅子』にはチャールズ・ラムのことを書いた章があり、それが後の『チャールズ・ラム伝』に繋がっている。福原は1963年10月に『チャールズ・ラム伝』(垂水書房)を出版し、庄野はその書評で以下のよ

うに述べている。

福原氏は大人の風格を持った、ゆうゆうたるラムではなくて、悩みも迷いも人一倍多い、哀れな文学青年としてのラムに心惹(ひ)かれ、そういうラムが、不幸な精神病を持った姉と二人きりで暮らして、昼間は東インド会社の書記を勤めながら「花の都のロンドン」で浮き世の苦勞を積み重ねてゆくありさまを描き出してくれる<sup>9)</sup>。

庄野は福原の『チャールズ・ラム伝』を高く評価し、その後も英文学の対談や書簡などを通じて福原と交流している。このように、庄野は住吉中学でラムと出会い、大阪外国語学校入学後から本格的に読み始めている。そして、九州大学時代には「ラムの研究会」を開き、作家になってからは『チャールズ・ラム伝』を執筆した福原麟太郎と交流を深めながら、小説や随筆などでラムのことを書き続けている。

次に、庄野が読んだ『エリア随筆』を整理する。庄野は「陽気なクラウン・オフィス・ロウ」(『文學界』、1982年1月～1983年8月)で、次のように述べている。

心齋橋の丸善で生れて初めて買った洋書がエヴリマンズ・ライブラリーの『エリア随筆』で、それはいま私の本棚にある。(中略)

ロンドンの旅から帰って一年たった去年の夏まで、私の持っているラムの本といえばこの『エリア随筆』一冊きりで、あとは同じ頃に丸善で買ったエヴリマンズ・ライブラリーの、「クライスツ学寮の三十有五年前」(Christ Hospital Five and Thirty years ago)ほか十二篇が入っている(中略)『英国随筆百選』があるくらい<sup>10)</sup>。

この記述から、庄野は「エヴリマンズ・ライブラリー」の『エリア随筆』を持っていたことが読み取れる。また、「令和3年度特別展—生誕100年記念—『作家・庄野潤三展 日常という特別』<sup>11)</sup>」の図録では、「庄野潤三の愛読書の一部」でチャールズ・ラム『The Essays of Elia』(研究社出版、1953年11月)が紹介されている。このことから、庄野は「エヴリマン

ズ・ライブラリー」と「研究社」から出版された、2種類の『エリア随筆』を読んでいたことが分かる。「エヴリマンズ・ライブラリー」の『エリア随筆』は、庄野が大阪外国語学校在学中に購入した本である。これは初版の1906年から本を購入する1939年までのいずれかの版であることは確実だが、証拠が見つかっておらず、庄野が読んだ版を特定することはできない<sup>12)</sup>。他方で、「研究社」の『エリア随筆』は庄野の蔵書として保管されているため、版を特定することはできるが、「作家・庄野潤三展 日常という特別」の図録には「後年に庄野が再購入したもの」という注が付記されており、「プールサイド小景」を執筆する前年と後年のどちらに購入されたものか不明である。そのため、本稿では、庄野が心齋橋の丸善で購入した年と同年の1939年の『エリア随筆』（「エヴリマンズ・ライブラリー」）を典拠とする。

庄野は『《大人の本棚》チャールズ・ラム エリア随筆抄』の書評で、学生時代に読んだ作品をいくつか挙げている。

いちばんに読んでみたのは、中尾先生が黒板に書いた「ドリーム・チルドレン」である。(中略)

それから「煙突掃除人の讃」を、私は読んだ。(中略)

最後は「古陶器」にふれておきたい<sup>13)</sup>。

これらの記述から、庄野は「ドリーム・チルドレン」(Dream-Children: a Reverie)、「煙突掃除人の讃」(The Praise of Chimney-Sweepers)、「古陶器」(Old China)の3作品を読んでいることが分かる。また、庄野は『エリア随筆』の中にある「定年退職者」<sup>14)</sup>(The Superannuated Man)を読んだことがあり、「陽気なクラウン・オフィス・ロウ」に次のように記している。

『ロンドン雑誌』五月号に発表され、『エリア随筆後集』に収められた「停年退職者」(The Superannuated Man)には、夕方、重役室へ呼び出され、さては首の申し渡しかと覚悟したら(中略)思いもかけ

ず、これまでの多年にわたる忠実な勤務に酬いるため、今後一生、毎月、俸給の三分の二ほどを受け取っては貰えまいかといわれた時の心持が告白されている<sup>15)</sup>。

『エリア随筆』の「定年退職者」は、ラムが東インド会社で働いていた経験を元に書いたエッセイである。エリア（ラムのペンネーム）が30年以上勤めていた会社から「今、退職すれば退職金を割り増しする」という話を重役に持ちかけられ、50歳の「私」が退職するという話が綴られている。一方で「プールサイド小景」は、会社のお金を使い込んで解雇された夫とその家族の生活を描いた物語である。両作品が会社を退職する人物を主人公としている点に着目し、「プールサイド小景」に「定年退職者」の影響があるのではないかという観点から作品を読んでもみると、両作にはいくつかの類似点を見出すことができる。

次章では、チャールズ・ラム『エリア随筆』の「定年退職者」と、庄野潤三の「プールサイド小景」の類似場面を考察する。

### 3. 「プールサイド小景」とチャールズ・ラム『エリア随筆』の比較

本章では、チャールズ・ラム『エリア随筆』の「定年退職者」と庄野潤三の「プールサイド小景」を5つの場面に分けて比較対照するとともに、庄野がチャールズ・ラムからどのような影響を受けているのかを論ずる。

1つ目は、会社員の表情を比較する。ラムの「定年退職者」では、会社勤めをするときの表情が以下のように記されている。

Independently of the rigours of attendance, I have ever been haunted with a sense (perhaps a mere caprice) of incapacity for business. This, during my latter years, had increased to such a degree, that it was visible in all the lines of my countenance. My health and my good spirits flagged.(...)

My fellows in the office would sometimes rally me upon the trouble legible in my countenance ; (...) L——, the junior partner in the firm, calling me on one side, directly taxed me with my bad looks, and frankly inquired the cause of them.(...)

出勤についての厳しさとは別に、私はビジネスに適性がないという感覚（たぶん単なる気まぐれであろうが）にずっと取りつかれていた。私の会社生活の後年の間に、これがひどく高じてしまっていて、顔の皺の一本一本に見て取れるようになった。私の健康も精気もおとろえた。

会社の同僚たちは、私の顔から読みとれる悩みについて時に冷やかすことがあった。（中略）若手の共同経営者L——が私を片隅に呼んで、顔色が悪いと単刀直入に言って私の気持ちを重くし、あからさまにその理由を尋ねた<sup>16)</sup>。

この場面の「私」は歳をとって健康や精気が衰え、顔色も悪い。そして「プールサイド小景」でも、「会社へ入って来る時の顔を見てごらん。（中略）入口の戸を押し開けて室内に足を踏み込む時の、その表情だ。彼等は何に怯えているのだろうか」と、主人公の勤める会社の社員たちが何か怯えた表情をしていることが描写されている。このように、会社での社員の暗い表情に類似が見られる。

2つ目は、作中に出てくる恐ろしい夢と、勤め人が抱いている気持ちを比較する。両作品の主人公は、会社勤めの不安や恐怖から恐ろしい夢を見ている。ラムの「定年退職者」では、夢が以下のように描写されている。

I had perpetually a dread of some crisis, to which I should be found unequal. Besides my daylight servitude, I served over again all night in my sleep, and would awake with terrors of imaginary false entries, errors in my accounts, and the like.

私は絶え間なく何らかの難しい局面に見舞われる恐怖を抱いてい

た。私はそういった局面には不向きであるときっと見られていただろう。昼間の勤めに加えて、私は一晩中眠りの中でまた勤めをくり返した。そして、帳簿への誤記とか、計算違いとか、その類の想像上の恐怖のためによく目を覚ました<sup>16)</sup>。

この夢は「私」が会計係として毎日繰り返す単調な事務仕事において、致命的な実務上の失敗（「帳簿への誤記とか、計算違いとか」）を犯しているのではないか、後にそのことが判明して大きな混乱が起きるのではないか、という強迫観念を示している。

一方、「プールサイド小景」では、勤め人が抱えている気持ちや悪夢が抽象的に描かれている。

彼等を怯えさせるものは、何だろう。それは個々の人間でもなく、また何か具体的な理由というものでもない。それは、彼等が家庭に戻って妻子の間に身を置いた休息の時にも、なお彼等を縛っているものなのだ。それは、夢の中までも入り込んで来て、眠っている人間を脅かすものなのだ。もしも、夜中に何か恐い夢を見てうなされることがあれば、その夢を見させているものが、そいつなのだ。

この場面では、勤め人である「彼等」を怯えさせるものについて、夫が妻に語りかけている。この「彼等を怯えさせるもの」とは、企業にしがみついて生きてゆかなければならない勤め人がもつ、自己の存在の不安を象徴したものである。

「定年退職者」の上記引用には、「私」が仕事上の失敗を恐れながら働き続けるといふ悪夢にうなされている場面があるが、「プールサイド小景」でも「何か恐い夢」を見た社員たちがうなされている。両作品では、仕事勤めに不安や恐怖心をもった登場人物が悪夢にうなされる点においても共通性が見られる。

3つ目は、主人公の職場での勤務態度を比較する。「定年退職者」の「私」が上司から退職するように説得される場面は、次のように描かれて



いる。

L—, I could see, smiled at the terror I was in, which was a little relief to me, (...) He went on to descant on the expediency of retiring at a certain time of life (how my heart panted!).

L——が、私の怖がっている様子を見て、微笑んだのが分かって、私は少しほっとした（中略）。彼は生涯の一定の時期に引退するのが有利だと詳しく説明した（私の心臓は何と激しく動悸したことか!）<sup>16)</sup>

このように「定年退職者」では、「私」が上司の発言に怯える様子が描かれている。「プールサイド小景」でも、青木氏が何かに怯えながら働いている場面があり、「僕がどんな時びくびくしないでここに坐っているだろう。自分の背中のところ、不意に誰かが咳払いをしたら、僕の身体は椅子の上から二三寸飛び上るかと思うほど、どきんとするのだ」と書かれている。

青木氏は社内では常に「びくびく」しながら椅子に座っていて、不意に誰かが咳払いをすると驚いて「どきん」としており、「定年退職者」の「私」も「怖がっている様子」で上司の発言を聞いて心臓が動悸している。このように、両作品では気弱な主人公の性格が類似している。

4つ目は、会社勤めの年数と解雇されたときの年齢を比較する。「定年退職者」では、別々の場面で次のように書かれている。

It is now six and thirty years since I took my seat at the desk in Mincing Lane.

I was fifty years of age, and no prospect of emancipation presented itself.

私がミンシング・レインの事務機の席について以来、今では36年になる。

私は50歳になっていた。しかも解放される見込みは全く立たなかった<sup>16)</sup>。

「定年退職者」では「ミンシング・レインの事務機の席について以来、今では36年」で、「私」は50歳になっても「解放される見込みは全く立たなかった」と書かれているが、この直後に会社を解雇されている。このことから、「私」は36年間働いた会社を50歳で退職していることが分かる。

また「プールサイド小景」では、「十八年も勤めて来て、こんなに呆気なくくびになってしまうとは」、「四十にもなって勤め先を放り出された人間は、いったいどうして自家の体裁を整えることが出来るのか」と書かれており、40歳の青木氏が会社のお金を使い込み、18年勤めた会社を解雇されている。両作品は勤続年数や退職時の年齢は異なっているが、長年働いてきた会社を中年になって退職していることが共通している。

5つ目は、作中に登場する「魂」を比較する。両作品では、毎日同じ会社で長時間働いていることによって、主人公が机や椅子などに「魂」が宿っているような感覚をもつ場面がある。「定年退職者」では、以下のように描かれている。

I had grown to my desk, as it were ; and the wood had entered into my soul.

いわば、私は自身が事務机となってしまう、机の木材が私の魂の中に入り込んでしまっていた<sup>16)</sup>。

「定年退職者」では、「自身が事務机となってしまう、机の木材が私の魂の中に入り込んでしまっていた」という感覚を抱くほど、自己の魂と会社で毎日長時間使用する事務機とが一体化する様子が描かれている。他方、「プールサイド小景」では、青木氏が始業前の会社の部屋の中を見まわして次のような感想を抱いている。

まだ一人も来ていない会社の部屋の中を、僕は見廻してみる。する

と、いつもそこに坐っている人間がいなくて、その人間を載せている椅子だけがある。(中略)

尻が丁度乗っかる部分のレザーは、その人間の五体から滲み出て、しみ込んだ油のようなもので光っている。それはきっとその人間の憤怒とか焦だちとか、愚痴や泣き言や、または絶えざる怖れや不安が、彼の身体から長い間かかって絞り出した油のようなものなのだ。僕にはそう思えてならない。

椅子の背中のもたれるようになった部分、そのひしぎ具合にも、その男のこの勤め場所での感情が見られる。否応なしに毎日そこへ来て、その椅子に尻を下す人間の心の状態が乗りうつるのは当然のことではないだろうか。

僕は、自分が坐っている椅子をも、そっと眺めやる。何という哀れな椅子だと思って。しがない課長代理の哀れな椅子よと……。

会社の椅子に毎日座っていると「その椅子に尻を下す人間の心の状態が乗りうつるのは当然」という青木氏の感覚は、椅子を使う人間の心と椅子との一体化の感覚を示している。この会社の椅子には、そこに座っている人間の「憤怒とか焦だちとか、愚痴や泣き言や、または絶えざる怖れや不安」が「油のよう」にしみ込んでいるのである。これは「定年退職者」の「私」が長時間の会社勤めをして、「自身が事務机となっしまい、机の木材が私の魂の中に入り込んでしまっていた」感覚を抱いている場面と酷似しており、その点で両作品は共通している。ただし、「プールサイド小景」では「定年退職者」を下敷きにしながらも青木氏の内面を細かく描写して人物造形を意図的に変えており、そこに庄野の独自性が見られる。

以上のことから、庄野潤三「プールサイド小景」の一部は、チャールズ・ラム『エリア随筆』の「定年退職者」の影響を受けていると言えることができる。

#### 4. まとめ

本稿では、庄野潤三「プールサイド小景」の一場面とチャールズ・ラム『エリア随筆』の「定年退職者」とを比較し、両作品の関連性を明らかにした。

これまでは共通点を述べてきたが、両作には相違点がある。「プールサイド小景」では、夫が会社の金を使い込んでクビになり、妻や子どもたちに様々な影響を与えるさまを描いている。一方で「定年退職者」は、会社員の中年男性が退職金を割り増しすることを条件に、長年勤めていた会社を退職する様子が描かれている。このように、作品全体のストーリーは異なっており、庄野は主に「プールサイド小景」の青木氏が会社勤めの苦悩を妻に告白する場面において「定年退職者」のモチーフを使っている。つまり、「プールサイド小景」は『エリア随筆』の影響を受けているものの、それを典拠とした作品と見ることはできない。

他方、庄野には『エリア随筆』の「定年退職者」と同様に会社勤めを題材とした「机」（『群像』、1956年4月）という作品があり、そこでは社員たちが自分の机で仕事することに執着する姿が描かれている。この職場では、自分の机や椅子を大切にしない社員はのけ者にされ、自分の机で仕事をする者には会社での居場所が保証される。当作品では、〈机〉と〈社員〉が不可分の関係となっているのである。本稿で詳しく述べることはできないが、「机」も『エリア随筆』の「定年退職者」を意識した作品である。

庄野潤三研究の第一人者である上坪裕介は、「庄野潤三の研究についても課題は残されている。（中略）チャールズ・ラムやウイリアム・サローヤンなどの庄野が好んだ外国人作家との比較研究や、庄野の個々の作品の詳細な分析、終戦直後の習作時代の新たな資料の発掘などがある」<sup>17)</sup>と述べており、「庄野が好んだ外国人作家との比較研究」は、庄野の研究課題の一つだと言える。このような研究課題を解明していくことを、今後の課

題としたい。

## 注

- 1) 河崎良二「庄野潤三とチャールズ・ラム」(『こだはら』第38号、帝塚山学院大学、2016年3月) 54頁
- 2) 庄野潤三『夕べの雲』(『日本経済新聞』夕刊、1964年9月6日～1965年1月19日)
- 3) 村手元樹「庄野潤三『プールサイド小景』論——チェーホフの笑劇『コーラス・ガール』との比較を軸に——」(『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第18号、2017年3月) 192頁
- 4) 河崎良二「庄野潤三とチャールズ・ラム」(『こだはら』第38号、帝塚山学院大学、2016年3月) 41頁
- 5) 庄野潤三「文学交友録」(1995年3月、新潮社) 52-53頁
- 6) 庄野潤三「年譜」(『庄野潤三全集 第十巻』、1974年4月、講談社) 578頁
- 7) 庄野潤三・吉田精一〈対談〉「戦時下の青春と文学」(『國文学 解釈と教材の研究』、1969年2月) 127頁
- 8) 庄野潤三「前途」(『庄野潤三全集 第七巻』、1974年1月、講談社) 36頁
- 9) 庄野潤三「福原麟太郎著『チャールズ・ラム伝』」(『東京新聞』夕刊、1963年11月13日、8面)
- 10) 庄野潤三「陽気なクラウン・オフィス・ロウ」(1984年2月、文藝春秋) 5頁
- 11) 「令和3年度特別展—生誕100年記念—『作家・庄野潤三展 日常という特別』」(2022年1月、練馬区立石神井公園ふるさと文化館)
- 12) 河崎の前掲論文には「庄野さんが購入されたエブリマンズ・ライブラリーの『エリア随筆』は一九〇六年版」(47頁)と記されているが、庄野が初版本を購入したという意味ではなく、庄野の購入したエヴリマンズ・ライブラリーの初版が1906年に刊行されているという意味である。
- 13) 庄野潤三「ラムとのつきあい」(『《大人の本棚》チャールズ・ラム エリア随筆抄』、山内義雄訳、2002年3月、みすず書房) 221-224頁
- 14) 庄野は「停年退職者」としているが、本稿では「定年退職者」に統一する。
- 15) 庄野潤三「陽気なクラウン・オフィス・ロウ」(1984年2月、文藝春秋) 332頁
- 16) 「定年退職者」の日本語訳は、論者が訳したものである。
- 17) 上坪裕介『山の上の物語 庄野潤三の文学』(2020年2月、松柏社) 264頁

## 付記

- ・庄野潤三「プールサイド小景」のテキストの引用は、十巻本『庄野潤三全集 第一巻』(1973年6月、講談社)に拠る。
- ・『エリア随筆』の「定年退職者」(“The Superannuated Man”)のテキスト引用は、Charles Lamb, *The Essays of Elia*. Everyman's Libraly, 1939に拠る。